

一 次の(1)～(10)の各文の傍線部を漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 10。

- (1) 民衆のホウキを鎮める。 1
- (2) 古い慣例をボクシユする。 2
- (3) 深刻なカツスイに見舞われる。 3
- (4) サツブウケイな部屋に住む。 4
- (5) カゴを認めて賠償する。 5
- (6) 多くのヘイガイが発生する。 6
- (7) 座右のメイを述べる。 7

- ① ヨウホウ場を経営する。
② 在留ホウジンの身を守る。
③ レイホウとして有名な山に登る。
④ 橋を補修してホウラクを防ぐ。
- ① ジュンボクな気質で慕われる。
② 部員同士のシンボクを深める。
③ 趣味でスイボクガをたしなむ。
④ 腰のタボク箇所^①に湿布を貼る。
- ① 家族とのカツトウを物語に描く。
② 国家のカンカツ下に置く。
③ 大声でイツカツする。
④ 自由をカツボウする。
- ① サツカシヨウを手当てする。
② 会社の体制をサツシンする。
③ サツチュウザイをまく。
④ 目のサツカクを利用する。
- ① ゴフク屋で着物を仕立てる。
② カイゴの念に苦しむ。
③ 長年のゴカイを解く。
④ ゴテンのような家を建てる。
- ① ゴヘイのある言い方を避ける。
② カヘイの価値が下落する。
③ 日光をシャヘイする。
④ 猛烈な暑さにヘイコウする。
- ① 隣国とメイヤクを結ぶ。
② 反戦思想にキョウメイする。
③ 川がメイロのように入り組む。
④ 仏の教えにカンメイを受ける。

- (8) 油断はキンモツである。 8
- (9) 株価がキョウトウする。 9
- (10) 船のザンガイを引き上げる。 10

- ① ビョウゲンキンへの感染を防ぐ。
② イッキンの食パンを焼く。
③ サンカクキンで骨折した腕を固定する。
④ 新作の情報がカイキンされる。
- ① 資産がトウケツされる。
② 水をフットウさせる。
③ 富士山をトウハする。
④ 寮のショウトウジカンとなる。
- ① 規則がケイガイカする。
② テンガイ付きのベッドで寝る。
③ 要件にガイトウする。
④ カンガイ深い思い出に浸る。

二 次の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えなさい。

ポストモダン以降、社会はどのように変化しているのだろうか。アンソニー・エリオットとジョン・アリーによると、現代社会は「モバイル」な特徴を有するに至っており、私たちはそれに伴って「モバイルな生」を生きつつあるとされる。彼らは次のように述べている。

A 人びとは、今日かつてないほどに「移動の途上」にある。大規模な社会変動——グローバルパレクション、モバイル・テクノロジー、絶えのなき消費主義、さらに気候変動——が、地球規模で人、モノ、資本、情報、観念の移動をますます拡大し続けることに内在している。今や人びとは、毎年延べ二三〇億キロメートル旅していると推定されている。「…」目も眩むような可能性と恐ろしいほどのリスクをもって、モバイルの1がまさに訪れている。

人、モノ、資本、情報、観念、技術などは世界中を縦横に駆けめぐり移動しながら相互に重層的に絡み合い、ときに乖離的に反発し、ときに相互に結びつきながら、複雑なたちで既存の現実をつねに揺るがせ変化させ、へ新たな現実を絶えず生成させ続けているのである。

B 以上のような社会のモビリティを現出させていくうえで、「デジタル革命」を経たメディアが果たしている役割は大きいと言えるだろう。「デジタル革命」とは、メディアの仕組みがデジタル・テクノロジーを用いた仕組みに移行することを意味するにとどまらず、メディアがデジタル・テクノロジーを用いることによって、そのテクノロジーを支えていた社会システムを大きく変えてしまうことをも意味している。

たとえば音楽を例にあげるならば、現代の音楽聴取のしかたはスマートフォンから音楽配信アプリにアクセスし、ストリーミング配信されたデジタル音源を聴取するという方法が一般的になっている。こうしたテクノロジーが音楽市場を

え、人びとのライフスタイルにもインパクトをあたえ、ウォーキングやランニングをしたり、飛行機、電車、自動車に乗って移動しながら、モバイルに聴取するものへと音楽のあり方そのものを変えてしまっているのである。

映像においても同様である。かつてアナログ・テレビによって放映されビデオテープに録画されていたものが、デジタル・テレビによって放映されDVDやBlu-rayに録画されるようになった。そして現在では、ウェブを通じてスマートフォンなどでモバイルに動画を視聴できるようになっている。これによって映像ビジネスも影響を受け、そうしたビジネスを通して私たちのライフスタイルそのものも大きく変容するようになってきている。モバイル決済などに代表されるようなフィンテックもまた、金融市場を変えると同時に、それによって人びとのライフスタイルをよりモバイルなものへと促し誘導している。

人、モノ、資本、情報、観念、技術などのモビリティは、いまや観光や旅を抜きに考えることができなくなっている。

世界の観光状況を見ると、世界中で海外を旅行する人びとの数は、二〇一一年（平成二三）年にはじめて一〇億人を突破し、その後も伸び続けている。国土交通省『平成30年版・観光白書』に記載されている直近の五年間では、二〇一三年で一億人、二〇一四年で一億四〇〇〇万人、二〇一五年で一億九〇〇〇万人、二〇一六年で一億四〇〇〇万人、二〇一七年で一億二〇〇〇〇万人である。国連の「世界人口白書」によれば世界人口は約七〇数億人と推計されているから、それにもとづかならば、世界人口の約六分の一の人びとが延べで海外を旅している計算になる。日本でも海外旅行者数は、二〇一七年には一七八九万人と毎年一五〇〇万人以上の日本人が海外に渡航している。訪日外国人観光客の数も右肩上がりに伸び、二〇一七年には二八六九万人と毎年数字を更新している。

観光は、こうした人の移動ばかりではなく、土産物やスイーツケースをはじめとするモノの移動も含んでいる。また、人びとは観光情報誌やウェブ、スマートフォンなどといったメディアを用いて、情報やデータを検索し、観光地に関する多くのイメージをもって観光へ出かける。それゆえ、情報、データ、イメージの移動も生じている。さらに観光地においてさまざまなモノや車柄を見聞きしたり経験したりすることによって、記憶を形成し、思い出へと変えていく（記憶、あるいは思い出の移動）。他に観光は、旅行代理店、航空産業などの交通業者、ホテルなどの宿泊業者をはじめとする諸産業と結びついて成立しているがゆえに、当然のことながらカネの移動を伴う。

モビリティを考察するうえで、観光は不可欠なのである。これについて、ミミ・シエラ^(註1)とジョン・アリーは「ツーリズム・モビリティ」という概念を提示している。彼らは次のように言う。

われわれが「ツーリズム・モビリティ」について言及するのは、明白なこと（観光がモビリティの一形態であること）を単に述べるためだけではない。そうではなく、様々なモビリティが観光を形づくり、観光がパフォーマンスされる場所を形成し、観光地をつくったり破壊したりすることによって焦点を当てるためなのである。人やモノ、飛行機やスイーツケース、植物や動物、イメージやブランド、データシステムやサテライト、これらの移動すべてが観光という行為へと結びつく。

ところで、観光客が観光地を訪れようとする際に、重要となるのがメディアの役割であろう。彼らは旅の情報や観光地のイメージをもって観光に出かける。そうした情報やイメージによって、どのような観光地が選択されるのか、どのような観光行動が行われるのかが変わってくることも少なくない。訪日外国人観光客の場合も同様である。彼らが接するメディアによって提示される情報やイメージは、日本のどのような場所を訪れるのか、そこでどのような観光行動をするのか、そして土産に何をかうのかを大きく左右するのである。(一)

国土交通省『訪日外国人の消費動向 平成29年 年次報告書』によると、日本を訪れた外国人観光客が「出発前に得た旅行情報源で役に立ったもの」のうち、回答数が最も多かったのが、「個人のブログ」(三二・二%)であった。ついで「SNS」が二一・四%であり、それに対して「ガイドブック」一四・六%、テレビ番組九・四%である。これを見ると、観光において重要な情報・イメージをつくりだす上で、ガイドブックやテレビといった「モノとしてのメディア」の役割が弱まりつつあ

ることがわかるだろう。かつては、こうしたメディアが果たす役割は大きいものであった。観光客が『地球の歩き方』や『るるぶ』などガイドブックというモノを手にして旅行する光景が、よくみられたものである。あるいはテレビというモノから発信されてくる番組が、観光情報やイメージを与えてくれた。(二)

だがいまや、観光において重要な情報・イメージをつくりだす上で大きな役割を果たしつつあるのは、ブログ、SNS、動画共有サイトなどのデジタルなウェブ上のプラットフォームである。プラットフォームとは「土台」を意味する英語だが、ウェブ上のプラットフォームとは「情報、サービス、商品が集積する土台となる環境」を指す。フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなどのSNSも、アマゾンや楽天などのネットショッピングサイトも、料理のレシピや動画を集めたクックパッドもウェブ上のプラットフォームとなる。

モノとしてはスマートフォンであろうと何であろうとかまわさない。そこが重要なのではなく、ウェブ上のプラットフォームこそが重要なのである。(三)

「虚構」の世界を拡張するデジタルなプラットフォームとしてのメディアが、観光をいっそう身近で「現実」的なものにしていくのである。近年、話題となることがあった「インスタ映え」も、その一例である。観光者はスマートフォンを用いてインスタグラムへ写真を投稿することによって、観光の状況についてパフォーマンスな装飾をほどこし、非日常性を演出しようとするのである。

現代の観光状況を明白に特徴づけているものをさらに浮き彫りにするため、以下ではとくに、「プラットフォームとしてのメディア」によって「現実」化される、モノのモビリティに注目してみることにしよう。その具体的な事例の一つに、東京ディズニーリゾートにおける「ぬい撮り」がある。

「ぬい撮り」とは、ぬいぐるみを主役に撮影し楽しむことを言う。ぬいぐるみにパフォーマンスをつけさせ、デジタル機器を用いて、その写真をSNSにアップすることが、主たる観光目的の一つとなっているのである。東京ディズニーシーでは、「ダッフィー」「シェリーメイ」「ジェラートニ」「ステラ・ルー」といったキャラクターが人気を博しているが、観光者は自分が所有するキャラクターのぬいぐるみとともに旅をし、それらをわざわざ持ち込み、ディズニーリゾートで「ぬい撮り」することを楽しんでいる。(四)

そうした観光では、「人のモビリティ」が2 されているわけではない。そうではなく、デジタル・メディアを通じてインスタグラム、ツイッター、フェイスブックなどにモノのパフォーマンスを撮るために、「モノのモビリティ」が2 されているのだ。こうした状況のなか、ディズニーリゾートでは、ポーズをつけやすく「ぬい撮り」がしやすいぬいぐるみが販売されるようになっていたりする。

同様の事例として、ぬいぐるみ専門の旅行代理店の事例を挙げることができる。現在、旅行代理店のなかに、人の旅行をコーディネートするのではなく、人が所有するぬいぐるみの旅行をコーディネートする会社が現れている。ここでは、顧客が所有するぬいぐるみを預かり、スタッフが一緒に旅先をまわり、宿泊や食事を行う。そして、ぬいぐるみがまるで旅を楽しんでいるかのような写真を、デジタル機器を用いてSNSにアップして顧客に見せるというサービスを行っている。このようにデジタルなプラットフォームとしてのメディアによって「現実」化されるモノのモビリティが、現代の観光において生じているのである。

(五)その回路を経てはじめて、「喜び」「楽しさ」といった、観光に不可欠である「情動」もまた、誘発されるに至っている。デジタル・デバイス上のインスタグラム、ツイッター、フェイスブックなどははじめとするプラットフォームを用いて、モノが旅することが観光の目的となり、そのことを通じて、ぬいぐるみを所有する人の楽しさ、喜びなど情動的な部分が満たされていくのである。このときモノのモビリティは、人びとの「情動のメディア(媒体)」となっているのだと言えよう。

その際、観光の「主体」となるのは、人間ではなく、ぬいぐるみというモノである。モノこそが、ツーリズム・モビリティの「主体(subjects)」なのである。人間は、その情動を誘発される「対象(object)」に過ぎない。観光産業、メディア産業、行政、地域などが、相互に連関し合い、モノをめぐってさまざまなモビリティの「ライン」(ティム・インゴルド)を現出させ、アクター間の布置連関のもとで、人びとの情動を創りだしていくのである。人びとは「情動」をもつ「主体」と

して呼びかけられるほど、より「客体」化していくのだ。

(遠藤英樹「ポストモダン以降の観光 シンクロする『現実』と『虚構』」による)

※問題作成の都合により、一部省略した箇所がある。



(注1) ポストモダンⅡ近代が終わった後の時代。

(注2) アンソニー・エリオットⅡ(一九六四) オーストラリアの社会学者。

(注3) ジョン・アアリーⅡ(一九四六～二〇一六) イギリスの社会学者。

(注4) ストリーミング配信Ⅱ動画や音声などのデータを小分けにして配信すること。

(注5) フィンテックⅡ金融と情報通信技術を組み合わせたサービスや産業のこと。

(注6) ミミ・シエラーⅡ(一九六七) アメリカの社会学者。

(注7) ティム・インゴルドⅡ(一九四八) イギリスの社会人類学者。

問1 傍線部(イ)「縦横に」・(ロ)「回路」は、本文中ではどのような意味か。最も適当なものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 11・12。

- (イ) 縦横に
- 11
- ① 大規模に。
 - ② 生き生きと。
 - ③ 四方八方に。
 - ④ 一定の法則で。

- (ロ) 回路
- 12
- ① 問題を解決するための手段。
 - ② 物事が行われる範囲や頻度。
 - ③ 問題を特定する手続き。
 - ④ 物事がめぐり流れる道筋。

問2 傍線部A「人びとは、今日かつてないほどに『移動の途上』にある。」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 13。

- ① 人、モノ、資本、情報、観念、技術などの国境を越えた移動が大規模な社会変動をもたらすようになった結果、既存の価値観が揺るがされるようになっていくこと。
- ② 大規模な社会変動によって、人、モノ、資本、情報、観念、技術などが国境を越えて移動するようになった結果、常に新しい変化がもたらされていること。
- ③ 大規模な社会変動が、人、モノ、資本、情報、観念、技術の中に、常に移動を志向する強力な動機をもたらしたため、人びとが恐ろしいリスクを引き受けることに躊躇しなくなっていること。
- ④ 人、モノ、資本、情報、観念、技術などについての人びとの価値観が激変したことによって、既存の現実を不安定化するような社会変動が常にもたらされていること。

問3 空欄 1 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 14。

- ① 黎明期
- ② 潜伏期
- ③ 暗黒時代
- ④ 黄金時代

問4 傍線部B「デジタル革命」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15。

- ① メディアがデジタル・テクノロジを用いた仕組みに移行した結果、移動の自由度を増した社会システムが不安定化し、音楽や映像、金融の分野において、アナログからデジタルへの移行の過程で混乱が生じた。
- ② 社会がデジタル・テクノロジを用いた仕組みに適合していくとともに、テクノロジとのかかわりの強いサービスや商品などの評価が高まり、モバイルなライフスタイルの人びととそうでない人びととの間に断絶がもたらされた。
- ③ デジタル・テクノロジの発展とデジタル機器の普及に伴い、メディアの仕組みが変容し、例えば音楽におけるデジタル・メディアが音楽のあり方そのものを変えたように、社会システムとライフスタイルが変わった。
- ④ デジタル・テクノロジを用いたメディアを通じて社会の中にモビリティが現出した結果、人びとのライフスタイルの中に仮想的な現実が導入され、音楽や映像、金融サービスのストリーミング化などの大きな変化がもたらされた。

問5 傍線部C「モビリティを考察するうえで、観光は不可欠」とあるが、なぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① 観光の中で生じる人・モノ・カネの移動は、情報、データ、イメージなどのモビリティの転化であり、観光の考察がモビリティの分析につながるから。
- ② 観光は、人・モノ・カネだけでなく、情報、データ、イメージなどの移動も生じさせており、あらゆる種類のモビリティを伴っているから。
- ③ 人・モノ・カネ・情報、データ、イメージの移動などのモビリティが観光を形成していくだけでなく、観光によってモビリティのあり方も変わっていくから。
- ④ モビリティは観光という場で、人・モノ・カネ・情報、データ、イメージなどに新しい価値を与えると同時に、それらの負の面も引き出すから。

問6 本文から次の文が脱落させてある。元の位置は(イ)～(ロ)のうちどこか。次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17。

このように、観光においては「モノ」としてのメディアではなく、「プラットフォームとしてのメディア」にメディアのフォーカスを移していくことが必要となってきたのである。

- ① (イ)
- ② (ロ)
- ③ (ハ)
- ④ (ニ)

問7 空欄 2 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。なお、二つの空欄には同じ言葉が入る。解答番号は 18。

- ① 前景化
- ② 相対化
- ③ 無意識化
- ④ 拡大化

問8 傍線部D「人びとは『情動』をもつ『主体』として呼びかけられるほど、より『客体』化していく」とあるが、どう

19。

- ① 観光産業、メディア産業、行政、地域などがモノの移動を通じて人びとの情動的な部分を満たそうとするとき、モノを写したメディアのやりとりをプラットフォームに依存するとき、「情動」の「主体」はメディアを利用する観光産業、メディア産業、行政、地域などとなり、人間の存在感は希薄化されていくということ。
- ② モノを通じて観光産業、メディア産業、行政、地域などにおいて人びとの情動が誘発されるとき、「情動」の「主体」は人とモノが渾然一体となっており、人間はよりモノに近い存在となっていくということ。
- ③ 観光産業、メディア産業、行政、地域などがつながり合い、モノのモビリティを媒介として人びとの情動を誘発するとき、情動を喚起する「主体」はモノとなり、人間は情動を喚起される単なる「客体」になっていくということ。

問9 筆者の主張として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20。

- ① デジタル革命と並行して社会のモビリティが高まったことで、現実が仮想空間に上書きされ、人の情動のあり方に虚構性が増えようようになってきた。
- ② デジタル革命は社会のモビリティを高めて現実を変化させてきたが、この変化は人の情動のあり方をも大きく変えてきたことがモノのモビリティをめぐる状況からわかる。
- ③ デジタル革命が社会のモビリティを高めたことは特に観光に影響を与え、人の社会的活動の場がプラットフォームに集約されていくきっかけとなった。
- ④ デジタル革命により社会のモビリティが常態化したことにより、人びとのライフスタイルが多面的で複雑なものになり、その結果人の情動のあり方が大きく変わってきた。

三 次の文章を読んで、後の問い(問1～10)に答えなさい。

人間の生命や尊厳にかかわる問題に市場原理を無思慮に導入するべきではない。ではどのようにしてそのような問題が解決されればいいのか。例えば、政府による公的介入によって解決するのがいいのか。

この節において、サステナビリティやSDGsの目標に沿った解決方法の基本方針について、介護問題を例にとりて説明しよう。そして、市場も、公的介入も、市場と公的介入のパートナーシップ(PPP)も、どれも十分ではなく、広範のステークホルダーの対話と協力によって、社会全体でコーディネーションを確立していくことが重要になることを説明しよう。

日本をはじめ多くの国において、介護サービスの持続可能性に懸念が持たれている。少子高齢化に影響されて、高齢者向けの介護士の供給が不足している。にもかかわらず、介護士の労働環境は悪く、賃金も低い。さらには、職業的に低い社会的地位に甘んじている。現状において、介護労働は差別や不平等の温床のようになっている。

介護士の仕事は「ケアの倫理」に下支えされることが求められる。ケアの倫理とは、ケアをする人とケアを受ける人の間に人間的なつながりを深めることを尊重する全人的なアプローチのことだ。利他的な、自己犠牲的な他者への奉仕の精神とは区別される。しかし実際には、その労働条件の悪さゆえ、誠実な介護士が燃え尽きてしまうような状況にあり、深刻な社会問題になっている。

介護サービスは、全ての国民に平等に提供されなければならない。これはSDGsの諸目標に合致した「誰一人取り残さない」基本方針である。(介護問題に直接関係のありそうな目標は3、5、8、10、17などだろう。)この 1 の確保のため、政府は介護士の賃金や労働環境を規制し、結果的に低賃金と劣悪な労働環境に甘んじざるを得なくなっている。

では、介護サービスをビジネスとして市場化して、介護士の賃金を市場均衡賃金に近づけることを、もつとしてみようか。この市場化により、介護サービスの多様化や効率化、さらには技術革新も進み、介護問題のかんりの部分が解決されそうに思われる。しかしよく考えるとそうではないのだ。

市場の競争原理に則って、純粋に営利目的の企業は、介護サービスの改善と差別化によって、主に高所得者層をターゲットとした事業展開を進めるだろう。その結果、2 ことになる。こうして、市場一辺倒のアプローチでは、SDGsの諸目標に反して、不平等と貧困をかえって助長することになる。一部の介護士は良い労働環境と十分な賃金を獲得できるようになるかもしれない。しかし、低所得者をターゲットとした社会的福祉事業としての介護サービスの質、介護士の賃金、介護士の労働環境は、むしろ悪化の一途をたどることになりかねない。

ならば市場化と併用して、低所得者層向けには公的介入をして高い政策賃金と労働環境の改善を図らうだろうか。さらには民間事業者とパートナーシップを形成して、新しい技術革新を低所得者層にも導入してみようか。しかしこのプランには 3 がある。それは国民の支持を得られないかもしれないということだ。つまり、このような介護制度改革のために、高い税金を支払いたくないとして、このプランが却下されるということだ。

このような国民の不支持には複雑な要素が絡んでいる。一つは国民の無理解である。介護サービスの充実自身にとっても生涯の満足度を高めるものだ。しかし兎角この意識が薄い傾向にある。また介護サービスの充実には、受給者の便益のみならず社会全体の質をも改善する正の外部性がある。介護制度の失敗は、家庭介護者のストレスや健康悪化、介護負担のためには生じる労働供給不足、社会的孤立や連帯の欠如などといった、大きな社会的費用をも誘発しているのである。しかし多くの国民はこのことに気付いていない。

日本においては、介護は個人や家族の問題であり、社会的な問題という意識を受け入れようとしていない 4 もあるとされている。国民が社会に対してよい介護サービスを提供してくれることを期待しないという思考習慣は、この 4 によっても下支えされている。

政府が長年介護制度改革を、他の政策課題と比較して低い優先度に留めてきたことも一因かもしれない。さらには、国民や様々なステークホルダーの間で目標や利害が一致していない、むしろ対立している状況も関係していそうだ。広範囲の国

民の支持がない以上、政府は具体的に介護制度改革の優先度を上げようとはしたくないだろう。

また、国民は、政府が単に優先度を上げただけでは、政府に対する期待を高めるまでに至らない。国民は、介護制度改革が重要であることを理解していたとしても、そもそも政府に期待していないならば、それだけでは現状を変えていく力になつていかない。国民、政府、様々なステークホルダーの間で、ポタンの掛け違いのような状況に陥っているのだ。このようにどんな悲観的に考えていくならば、サステナブルでない介護サービスの現状には合点がいつてしまう。

SDGs は全市民に向けてサステナビリティの大義を呼び掛けている。しかし個々人の大義はうまく実行されず、個人の

大義の単純和では状況打開に至らない。特に介護問題においては、笛吹けど踊らず^(イ)、である。

新しい資本主義は、「どのような問題でもあきらめない」精神に基づいた、進化的でダイナミックなシステム構想になる。そしてこの精神は、情報通信技術の発展と普及にも強く後押しされることになる。では介護問題の解決における主役は誰になるのかというと、それは個人でもコミュニティでも政府でもない。これから市場の波に揉まれようとしている、先ほどまでは悪いイメージが先行していた、高所得者向け介護ビジネスを手掛ける起業家（アントレプレナー）なのである。

ただし、これから説明される起業家はビジネス・アントレプレナーではなく、「社会的アントレプレナー」のことである。それは、サステナビリティの大義を掲げ、営利企業を組織し、その社会的責任の具体的なビジョンと計画を自社のホームページに掲載し、その進捗状況を収益とともに随時公開し、あくまでビジネス活動を通じて収益を稼ぎつつ、自らの大義、自身に課せられた社会的責任を果たそうとする、血気盛んなチャレンジャーである。

社会的アントレプレナーは、サービスを高所得者向けだけに全面的に特化するのではなく、低所得者層にも広く平等に提供する。介護士の労働環境や賃金を改善する。イノベーションを促進する。新しい技術革新を低所得者向けのサービスにも適用する。地域コミュニティや自治体とのパートナーシップを強化する。このように、短期的な利益ではなく、長期的、持続的なメリットを広く社会にアピールして、社会的責任を具体的に果たそうとするのである。

では、はたして実際の高所得者層は、営利追求に徹した介護サービス業者ではなく、このように社会的責任を果たすアピールをする企業に魅力を感じてくれるだろうか。本書は、そのような高齢者層が、全員とは言わないが、ある程度存在することを仮定する。この場合には、社会的アントレプレナーはすぐには倒産せずに、よいスタートアップを切ることができよう。

ここからは多様なステークホルダーが段階的に関与していく。まず投資家は、サステナビリティを目指すこのような企業に積極的に出資することを考えるようになる。介護サービス業界においてサステナブルな経営をする企業に対して、魅力を感じる投資家が増えていく。同時に、第三者機関は、企業の非財務情報を評価し、企業がサステナブルな経営をしているかどうかを指標化して、サステナビリティに関心のある投資家にわかりやすい判断材料を提供するようになる。

介護士は、このような企業の大義に共感し、従業員として協力するとともに、自身の大義の内容も変化させていくことになる。つまり、心のつながりを大切にケアの倫理をより深めて、高度な技術や専門性を発揮するプロフェッショナルを追究するようになる。介護士は自己イメージも大事にし、「私のしている仕事は大変だけれどもやりがいのある大事な仕事であり、多くの人に勧められる」ことを、介護サービスに不可欠な倫理性であると捉えて、社会的偏見の是正に意識的に取り組むようになる。介護サービス業者はこのような従業員の大義の変容を積極的に支援していかねばいけない。「救済者に救済を（ワグナー「パルジファル」最後のセリフ） 介護士にケアを！」というわけだ。こうして、経済的動機や法的義務だけでは捉えきれない多様な倫理性を支えられながら、介護サービスは成長していくことになる。

事業が軌道に乗ってくると、自治体や地域の支援をもっと受けられるようになる。営利目的の高所得者向け介護サービスであれば、このような支援を受けることはできないはずだ。地域住民からの信頼、さらには全国民からの広範の信頼を獲得できるようにする。こうして国民の介護問題に対する理解と関心が高まり、介護士に対する職業的な地位改善も期待できる

ようになってくる。

ここに到達するまでの道のりは既に平坦^{へぐたん}ではない。しかしこれでもまだ、当初の社会的アントレプレナーシップが持続可能になったとまでは言い切れない。

そこでようやく政府の登場である。政府は介護制度改革の優先度を上げることに国民の支持が得られると判断するようになる。そしてようやく介護サービス業への支援を具体的に進めることができるようになる。この段階に至って、サステナブルな介護を目指す社会的アントレプレナーの大義は、ようやくビジネスとして持続可能になる。

（松島^{まつしま} 著『サステナビリティの経済哲学』による）
※問題作成の都合により、一部省略した箇所がある。

（注1）ステークホルダー＝利害関係者。

（注2）コーディネーション＝協調。

（注3）全人的＝人を、身体だけでなく精神や社会・経済的背景なども含めて包括的に捉えるさま。

（注4）ワグナー＝（一八一三～一八八三）ドイツの作曲家。後の「パルジファル」は彼が制作した楽劇。

問1 傍線部（ア）「温床・（イ）「笛吹けど踊らず」は、本文中ではどのような意味か。最も適当なものを、下の各群の

①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 21・22。

- （ア）温床
- 21
- ① 好ましくない事柄を象徴するもの。
 - ② 好ましくない事柄が発生しやすい環境。
 - ③ 好ましくない事柄が発生する条件。
 - ④ 好ましくない事柄を食い止める場所。

- （イ）笛吹けど踊らず
- 22
- ① 働きかけても反応がない。
 - ② 努力しても解決できない。
 - ③ 行動しても意味がない。
 - ④ 協力したくてもできない。

問2 傍線部 A「ケアの倫理」に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

23。

- ① ケアをする人とケアを受ける人が人間的なつながりを持つことを大切にすることをアプローチのことであり、介護士の仕事の基盤となるべきものだが、現実には介護士の労働条件の悪さからその実現が阻害されている。
- ② ケアをする人とケアを受ける人の間の人間的なつながりを深めようとするアプローチのことだが、実際の介護の仕事では自己犠牲的な他者への奉仕精神として常に現れてしまい、社会問題の解決を阻む要因の一つとなっている。
- ③ ケアをする人とケアを受ける人の両方の人間性を尊重するようなアプローチのことであり、介護の仕事で重要なものだが、現実にはケアをする側の労働環境の悪さや低賃金が維持されており、社会問題に対して無力であるといえる。
- ④ ケアをする人とケアを受ける人の間の不一致や不和を調整するようなアプローチのことだが、現実にはケアをする人を雇う側しか把握しておらず、介護をめぐる様々な社会問題を解決する糸口にはなれない。

問3 空欄 1 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

24。

- ① 親和性
- ② 倫理性
- ③ 網羅性
- ④ 平等性



問 4 空欄 2 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

25。

- ① 介護サービスは支払い能力に応じて細分化し、この市場の政府による統制は困難になる
- ② 介護サービスは利益重視の産業となり、介護士の賃金や待遇が悪化するような流れが生まれる
- ③ 介護を必要とするが支払い能力のない低所得者はこの市場から締め出される
- ④ 介護サービスは高価格化し、高所得者層も含めて人々は十分なサービスを受けられなくなる

問 5 空欄 3 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

26。

- ① 前提
- ② 死角
- ③ 前例
- ④ 穴場

問 6 傍線部 B「国民の無理解」とあるが、筆者が考える「無理解」の理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

27。

- ① 国民の多くは介護サービスを実際に受ける機会がなく、介護サービスが社会全体に対してどのようなプラスとマイナスの影響を与えるかという点について知識や関心を持っていないから。
- ② 国民の多くは介護サービスの便益が社会そのものの質にかかわっていることや、社会の負担する費用の規模に介護制度が成功するかどうか大きくかかわっていることを知らないから。
- ③ 国民の多くは多角的な視点で介護サービスの社会全体に対する影響を理解することが不得手であり、失敗した介護制度が社会的費用を誘発してしまっていることに気付いていないから。
- ④ 国民の多くは介護を自分にかかわる社会的問題として受け止めておらず、介護サービスの充実が社会全体に好影響を与えることや、介護制度の失敗が社会的損失になることを認識していないから。

問 7 空欄 4 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。なお、二つの空欄には同じ言葉が入る。解答番号は

28。

- ① 権威
- ② 理論
- ③ 無念
- ④ 偏見

問 8 傍線部 C「ボタンの掛け違いのような状況」とあるが、どのような「状況」か。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

29。

- ① 介護について政府が国民や様々なステークホルダー間に優先度の格差をつけていることが、介護関係者のやる気を下げて介護制度改革を困難にしている状況。
- ② 国民、政府、様々なステークホルダーのいずれも介護制度に関する理解が不十分であることが、介護制度改革について合意形成を阻む原因となっている状況。
- ③ 介護のステークホルダーが多岐に渡り目標や利害のすり合わせが困難であることが、国民の意見の統合を阻害し、政府が介護制度改革の優先度を上げない原因になっている状況。
- ④ 国民や様々なステークホルダーの間で目標や利害の対立があることや、政府に対する国民の期待感の欠如が、政府による介護制度改革を困難なものにしている状況。

問 9 傍線部 D「社会的アントレプレナー」に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

30。

- ① 目先の利益にとらわれず、社会への長期的なメリットを広範囲にアピールして、社会的責任を具体的に果たそうとするが、その事業が持続可能なものになるには政府がその事業にかかわる改革の優先度を上げる必要がある。
- ② 短期的な利益と同時に長期的、持続的なメリットを広く社会に伝えることを通じて、事業を通じて現実的に社会的責任を果たそうとするが、その事業を軌道に乗せるには政府がその事業にかかわる改革の優先度を上げる必要がある。
- ③ 目先の利益よりも長期的、持続的なメリットを優先して社会的問題を具体的に解決しようとするが、その事業を政府の支援対象とすべきかの短上たかに載せるには、自治体や地域の支援が不可欠である。
- ④ 短期的な利益ではなく、社会への長期的、持続的なメリットを事業目的として社会的責任を果たそうとするが、その事業のスタートアップには自治体や政府の介入が前提として不可欠である。

問 10 筆者の介護問題に関する考えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

31。

- ① 人間の生命や尊厳にかかわる問題を市場原理によって解決することには大きな危険が伴い、社会的アントレプレナーもその危険性から逃れられないため、政府による公的介入が必要である。
- ② 人間の生命や尊厳にかかわる問題の解決には、市場原理に進化的でダイナミックなシステム構想を取り入れることが不可欠であり、その試金石となる社会的アントレプレナーの存在が必要である。
- ③ 人間の生命や尊厳にかかわる問題は、市場原理や政府による公的介入だけでは解決できず、サステナビリティの大きな義を掲げて社会全体での解決を促す社会的アントレプレナーの存在も必要である。
- ④ 人間の生命や尊厳にかかわる問題においては、市場原理と政府による公的介入どちらの解決策もケアの倫理という観点で不十分であり、それを補う社会的アントレプレナーの存在が必要である。